



My Alphabet

A B C D E F G

I can say my A B C.

H I J K L M N

I can write it with my pen.

O P Q R S T U

I can read it; how about you ?

V W and X Y Z

I can repeat my A B C.

(© Words by Yuri Kuno)

子どもたちが♪ABCの歌を元気よく歌えるようになった頃、このライムを見せて、「読めるところがあるかな？」と誘い掛けると、元気な子どもがA,B,C …と読み始めます。そしてみんなでZまで言ってくれます。「あれ、抜かしたところない？」と聞くと、「確かに！」という顔をして、黙ってこちらを見えています。子どもって、読めるところだけを読むのですね。読めないところはお構いなしに飛ばしてしまって、平気な顔をしています。

そこで、「じゃ、全部読んでみよう」と誘うと、後について言ってくれます。「ABCは何回書いてある？」「3回！」「じゃ、Iは？」「5回！」どうやら大文字だけ数えています。追求せず、「じゃ、もう一度読めるところだけ読んでみよう」と誘って、こちらは全部読みます。子どもも平気でついてきます。小文字の部分も何となく目で追っています。「…ができる」という表現は文字で理解していなくても、聞いたり口頭で言ったりしているので十分に「音」が入っていますから、至極当たり前のように読めるのです。こんなところが、子どもの「読みの始まり」かな、と思っています。

I am (Ken Sato).

I am a Japanese (boy).

I am (ten).

I am (happy).

I have (2 brothers).

Good-by! See you next week !

初めて子どもたちと出会って挨拶をしたら、直ぐにこちらの名前を言います。そして、子どもにも名前を覚えてもらうところからコンタクトが始まります。だんだんに自己紹介の内容を多くしていくのですが、子どもは不思議なくらい文字を見ないでも、自分のことを言えるようになります。

この簡単な自己紹介をみんなの前で言えるようになった頃、上の文例を見せると、「あ、さっき言ったのはこれね」とすぐに納得して、これを見ながら、()の中を自分のことに置き換えて、この順番で言おうとします。

順番を間違えない、ということは、読んでいるらしい、この4つの **I am** で始まる文の順番を辿って、**I have** (兄弟姉妹の数)を言えるのか、何を手掛かりに判断しているのか不思議なくらいです。言えるようになっていると、読める、ということでしょうか。子どもが、文字に親しみ、読もうとする力は侮れません。たどたどしく読もうとし始める前に、「英語らしい音」を溢れるほど聞かせて、「英語らしく話そう」とする力をつけておくと、「言えること」が文字化されているものを「読もうとする力」が育っていくのだと思います。

「読む力」を増進させるためにも、子どもが耳をそばだてて聞きたくなる英語をたっぷり用意して、英語の音があふれた授業をしたいものです。